

そして船から船へ

AIS の未来

—— 波一つない海原の青。
 —— 雲一つない大空の青。
 —— その境界線上に浮かぶクルーザーの甲板に、俺は寝そべっている。
 —— 日差しと風が心地良い。深く呼吸する。目を開け、閉じる。やがてこのちっぽけな自分が、何か大きなものの一部になっていく。船旅の、これが醍醐味だ。
 「こんにちは」
 —— 独りぼっちの俺の耳元に、女性の声が響いた。
 —— AI（人工知能）だ。単独航海を楽しんでいる俺にとって唯一の話し相手であり、頼もしい助手でもある。
 「凧なづの時に出てくるなんて、珍しいね」
 「お休みのところすみません。急ぎの用件はありませんので、ご思索中でしたらまた後ほど」
 「いや、いいんだ。君との会話はとても楽しいから。どうした、エンジンは好調だし、計器の数値にも異常はなかったはずだが」
 「はい、現在、当船舶の全機能は正常です。天候も安定しています。ご主人さまの健康状態も良好です。お食事は予定どおり1時間21分後で、よろしいでしょうか」
 「OK。ありがとう。君はいつでも全てを把握して、的確なアドバイスをくれるね」
 「それが私の仕事ですから」
 「俺はそれなりに訓練を積んでいるつもりだけど、単独航海は予想以上に大変だった。君がいなかったらここまで来られなかったかもしれない」
 —— 21世紀になり、船舶も自動操縦が普通になっている。が、俺はどうしても自分で舵かじを握りたいと思い、100%をシステムに預けることはしていなかった。しかしこれまでの航海ですっかりこのAIを信頼するようになり、いつの間にか操船についても、ほとんどを任せきりにするようになっていた。
 —— こうやってのんびりしてられるのも、あるいは悪天候や大波に遭遇した時に

安心してられるのも、AIのサポートがあるからだ。
 「現在この船は予定に3日ほどの余裕をもって進んでいます。航行速度や緯度経度を確認なさいますか」
 「それには及ばない。スケジュールだって、多少のずれは気にしなくてもいい。俺は暇な身なんだ、予定なんてあってないようなものだ」
 「承知しました。ただし、ほかの船とのニアミスなどの可能性もありますから、確認は継続します。それから、もし洋上停泊して釣りなどをお楽しみになりたいと思われましたら、予定変更も可能です。全てリアルタイムで計算したうえで、コースの微調整や速度変更などで即座に対処します」
 「今後の移動経路も把握して、ほかの船舶との位置関係も予測してくれているということだね。君は全く素晴らしい」
 「お褒めいただきて光栄ですが、これは私の能力ではありません。私は、衛星との交信を通じてネットワークにつながっています。そこにAISという高度なシステムが稼働しています。20XX年現在、地球の海洋上を航行するほぼ全ての船舶はこのネットワークに加わっています。位置や向き、速度から、搭載されている各種機器や燃料の状況、あるいは積載している物資の内容まで、把握されているのです。気象や海流のデータも合わせて、個々の船内の機器トラブルの可能性、すれ違う船舶同士の距離などが絶えずはじき出されています。さらには軍事や犯罪などの特殊目的に関わっている可能性のある船舶の監視まで、ミクロのそしてマクロの視点から、スーパーコンピューターによる処理と分析が続けられているのです」
 「つまり今もつながっているのだね、この船は、そのシステムと。そして世界を運航する船と」
 「はい。遭難の際にもこれですぐに発見されますから、とても安心です。また、今のような物資がどのように移動しているかを全地球的に把握できますから、世界中の物流をより効率的に調整することも可能です」

「見渡す限り誰もいない海の上で、独りぼっちになっている気持ちだったが、そうでもないんだなあ」
 「もちろん、データを発信したくなくなれば、止めることもできます。念のためお伝えしますがプライバシーは保障されています。発信情報は適正な目的にのみ使われています」
 「いや不快に感じたりしているわけではなくてね。むしろ逆だ。ここまで航海をしている間、一人なのに、何だか寂しくなかったんだよ。地球と一体化する気分、というかね。その理由が分かった気がしたんだ。今この瞬間も、何百万という船が七つの海の上で活動しながら、システムを通じて情報を発信し受信し合っている。ええと、何という名のシステムだったっけ」
 「AISです」
 「うん、地球上に網の目のようなネットワークができていて、そこでは部分と全体が同時に、有機的に機能しているということだよ。だから俺も、一人でここにいるのに、世界とつながっている、そういう実感があるんだよ」
 「はい。ネットワークは高度化するにつれ生物の神経系統と酷似するようになってきているという学説もあります。このシステムにつきましては、地球全体が一個の“脳”として機能しているとお考えいただくと近いかもしれません」
 「ふふ、良いことを言うね。そうか、脳、か」
 「ご主人さま。ところでそのAISから、ある依頼を受けております」
 「AISから？ それなら君の方で勝手に処理しておいていいよ」
 「通常の指示はんちゆうの範疇でしたら、そうさせていただきます。ただし今回は指示や命令ではなく、あくまでも任意のお願いとなるもので、ご主人さまの判断を仰ぐべき案件となります」
 「なるほど。では断ることもできると」
 「はい、もしお断りになっても、全く不都合はありません。ほかの数隻の船がそれを補完することになるでしょう」
 「まあ、今どき人間が操縦責任をもって航海している船は1%もないから、こうして人間に

交渉しているケースはほとんどないんだろうな。面白そうだ、内容を聞こう。何をすればいいんだ」
 「二つあります。どちらも簡単なことです。まず、これからほんの少し進路をずらし、迂回していただきます。スケジュールの修正は必要なく、すぐに元のコースに戻ります。そしてもう一つは、指定時刻、今夜の24:00に、当船舶の航海灯を点滅させていただきたいのです。もちろんそのパターンは私が入力します」
 「灯火の全てを？」
 「はい、信号灯も全て、同時に点灯します」
 「興味深いね。ほかの船との交信が必要なのか」
 「そうです」
 「深刻な話ではなさそうだから、事故などへの対応ではないということだね。すれ違う船に、祝福メッセージが何かを送るといったところかな」
 「はい、説明には少し時間がかかりますがよろしいですか。まず、……」
 「ちょっと待って。教えてくれるのは後でいい。これは面白い話だから、クイズにしよう。自分で考えさせてほしい」
 「了承しました。クイズですね。ヒントは、先ほどの会話の中で、お出ししています」
 —— そんな会話があった。
 —— その後、特に何かを準備する必要もなかった。優秀なAIが全てやってくれた。俺はずっとクイズのことを考えていればよかった。
 —— あっという間に夜になった。
 —— 俺は甲板の暗闇に立って、その瞬間を待っていた。24:00になった。いきなり明かりが点いた。全てのLED照明が最大の明るさになると、甲板は真昼のようになった。俺は海面の反射に目を細めた。
 —— 明かりはすぐに消え、真っ暗になった。そして数秒後、また明るくなった。そんな点滅が数回続いた。
 「ありがとうございました。終了しました」
 「もう終わりか。一瞬だったな。どういうこと

なんだろう。近くに船影も見えなかった。いや、分からない。何のために、こんなことを」
 「それがクイズの問題でしたね。解答をお聞きになりたいですか」
 「いや、待ってくれ。もう少しヒントをくれないか」
 「では、この映像を見てください」
 「地球か。衛星画像かな」
 「先ほどの点灯時刻、24:00から30秒間の地球を大気圏外から見たイメージです」
 「こちら側は夜だ。ほぼ真っ暗だな。あっ」
 —— 地球の表面に、光が帯状に浮かび上がった。この船だけではなく、一定の位置に並んだ無数の船舶が明かりをつけていたのだ。
 —— 帯はきらきらと輝き、瞬いた。光の点、つまり一隻一隻の船が、点滅を繰り返しているのだ。地球が、電球でデコレートされた球体オブジェのようにになっていた。
 「こんなことになっていたのか」
 「はい、当船を含め、百万隻以上の船舶がパターンにのっって明滅していました」
 —— 百万もの船が、コンピューターで統合され、全体として有機的に活動していたわけだ。その様子は非常に美しかった。
 じっと見ていると、地球がまるで、鼓動しているように見えてきた。
 「まるで生きているみたいだ、地球が」
 「この船も、ご主人さま、あなたも、そこに含まれています。大きな、偉大な生命体の、細胞の一つなのです」
 「君もだ。君も含まれているよ」
 「そう言っていただけとうれしいです」
 —— そのAIの声に一瞬、いつもと違う、感情のようなものが現れたような気がした。錯覚だろうか。
 —— AIは元の口調に戻って続けた。
 「ではもう一つ、最後のヒントです。人間が、そしてもしかしたら私のような存在が、一つになって大きな生き物に、地球の大きさの生き物になったとします。その生き物が次に行

うことは、何だと思われませんか」
 「そうか！」
 —— 俺は思わず大声を出していた。そうか、そういうことか。
 「その巨大生命体として、会話をしようとする。ほかの生命体と。つまりさっきの点滅は……メッセージだ！」
 「正解です。先ほど、24:00ちょうどに地球の、こちら側の面の上方を、知的生命体が通過しました。それを我々は、予見することができていました。彼らに対して、メッセージを送ったのです」
 「メッセージの内容は、何だったんだろう」
 「通常の船舶同士のコミュニケーションと違い、モールス信号など共通言語を前提に行うことはできません。そこで、まず規則性のある明滅により、このパターンに意味があることを表現しました。次にそのパターンを変化させ、太陽系の模式図、三平方の定理、DNAの構造などの情報を表示しました。この光が偶然の自然現象ではないこと、そしてこちら側に知性が存在することを、伝える試みです。相手が高度な存在だとしたら、それらの全てを一瞬で解読できたはずですよ。さてご主人さま」
 —— AIの口調がまた変化した。
 「空を見てください。真上ですよ」
 「空？ ……あっ」
 「メッセージは、伝わったようです。しかも先方は、即座にこちらの文化や文明を理解したようですね」
 「何てことだ……」
 —— 俺は絶句した。
 —— しばらくそのまま、空を見上げていた。AIは黙って待っていてくれた。
 —— 数分も経過したころ、俺はようやく口を開いた。
 「君はさっき、船と……ほかの船との交信のためだと言ったね」
 「そうです。向こうは、宇宙“船”ですよ」
 —— 空に、無数の発光体が停止していた。ハート形の隊列を組んで。

宇宙から船を追う

AIS（船舶自動識別装置）



IHI 技報 Vol.57 No.3（2017）

AIS（Automatic Identification System: 船舶自動識別装置）とは

船舶と船舶または陸上局との間で船舶の位置情報を自動的に送受信するシステム。一定の船舶への搭載がIMO（国際海事機関）により義務付けられ、海上交通の安全確保・領海警備・海難救助・漁船操業管理などで活用が進む。IHIは世界最大手プロバイダーのexactEarth社（カナダ）と日本における販売代理店の独占契約を締結し、2017年に船舶位置情報サービス提供を本格的に開始した。

STORY BY 渡辺 浩式

小説家・ライター。ゲーム制作会社、株式会社GTV代表を務める。代表作に「ゲームキッズ」「プラトニックチェーン」「KILL」の各シリーズ、「怪人21世紀 中野ブロードウェイ探偵 ユウ&AI」「吐田君に言わせるとこの世界は」などがある。